

“狭い西条を飛び出 しなさい!”



青木利夫先生

社会探究領域
越境文化授業科目群



インタビュー担当
橋本晨之介・長野葵

学校に行くことが 全てではない

研究内容について教えてください。

最初に取り組んだのは、20世紀初めのメキシコの教育の歴史研究。その後は、現代までの多文化教育に関する研究をして、今はテーマを昔に戻して、19世紀から20世紀の子どもの歴史や教育史、福祉史をやっています。僕の専門はメキシコの近現代史です。

メキシコをテーマにしたきっかけは何ですか？

元々僕は東京外国語大学の外国語学部のスペイン語学科で、スペイン語圏の歴史や社会文化の授業が面白くて、メキシコを勉強したいって思った。その一方で日本の教育問題にも関心があって、大学2年生ぐらいから勉強し始めたんだよ。日本の教育に関連する文献を読んでいるうちに学校や教育そのものに疑問を持つようになって、日本の教育の勉強を続けようと思っていた。でも卒論では、せっかく勉強しているスペイン語も生かしたいという気持ちもあって、テーマを日本の教育かメキシコの歴史かどっちにするかで悩んでいたんだよね。そんな時に、『脱学校の社会』という本を書いたイヴァン・イリッチという思想家が近代制度を批判するセミナーをメキシコで開いていることを知って、メキシコの教育問題に関心を持った。その後に、ある有名な日本の思想家がメキシコの大学で客員教授として講義をしていた時の滞在印象記の本を読んだのだけど、そこに日本とメキシコの比較研究は面白いテーマだって書いてあって、まずはメキシコのことをやろうと思った。4年生では1年休学して、単身メキシコに飛んで旅行をした。卒業後は、大学院に進学して、メキシコの勉強を続けたという感じ。



メキシコと日本の 教育制度の違い

メキシコと日本の教育制度の違いは？

世界的に見ても、教育の制度そのものはあまり変わらないよ。国によって1、2年の違いはあるけど、メキシコと日本は制度としてはほとんど一緒だね。ただメキシコは、貧富の格差や都市と農村の格差もすごく大きい。義務教育制度は日本と同じだと思うけれども、全員が中学校を卒業しているとは必ずしも限らない。その時に考えるのは、教育が遅れているからメキシコはダメなのかどうかっていうこと。逆に言うと、日本はほぼ全員が高校まで進学して、その先に大学に行こうとしているけれど、全ての日本の子どもが幸せだと言えるか。

例えば学校のいじめが社会問題化してきたのも、もう何十年も前の話だよ。学校教育がきちんと行き渡ることが社会を良くして、子どもたちを幸せにするとは限らない。むしろ学校に行くことが子どもたちには大きなプレッシャーになっていたり、逆に学校で成功した人は失敗しないようにピクピクしながら受験や就活をしていることはないのか。そういう風に日本の学校制度の中で感じられ続けているかもしれない。一方でメキシコは、それほど生活が豊かでない子どもたちは学校に行くという選択肢もあれば、働くという選択をすることもある。もちろん小さな子どもが劣悪な環境で働くことには問題はあるけど、学校に行くことだけが全てじゃないとも言える。学校にしか居場所がない日本社会って、子どもたちにとって逃げ場がないでしょ。どっちが子どもたちにとって良いのだろうという風に比較をしていくと、日本社会の問題点が見えてくる。“日本人は制度に縛られている、だけどメキシコ人は制度を利用している”って言い方を僕はするんだけど、色々なものの考え方が日本とメキシコって違うから面白いよね。



メキシコで1年間滞在して、どのような影響を受けましたか？

お金だけ持って、行き当たりばったりでメキシコに行ったんだよ。偶然出会った地元の人に宿を貸してもらったり、街をフラフラ行ってみたり自由に過ごしたけど、全然違う価値観や文化の所に身を置いてみるとやっぱり色々と考えることがあるわけだよ。あの一年がなければそもそも大学院に行こうとも思わなかったし、大学教員にもなってなかったから、そもそも広島に来ることもなかっただろうね。でも大学院に行ったら研究者や大学の教員になるというルートがあって、元々少し教員志望だったから、結局自分には今の仕事が一番合っていたんだと思う。

社会の 違和感に 気づくことが スタート

先生の研究における着眼点はどのように養われたのですか？

僕はよく学生に、「社会に対する違和感ってない？」って聞くんだよ。もちろん直接自分が関係していなかったとしても、何かおかしいと思う感覚を大事にする。するとそこから広がっていくと思うんだよね。ある問題について「じゃあなんでこうなるんだ」って考えていくと、また「じゃあこれはどうなの？」って広がっていった。だからまずは漠然とした社会に対する違和感に気が付くかどうか。その違和感が僕はたまたま教育だった。必ずしも本を読むだけでなく、友達や家族と話すのだって、それこそ道を歩いてたって「あれっ」って思うことはあると思う。その関心をさらに広げられるかどうかの問題。だから僕は友達とか色々な人と話す場が大事だと思う。違う意見が聞けるし、そこでまた一つ発見があるかもしれない。

学生が何かしら問題意識を持った時に、第一歩として何をすればいいのか？

それは別にこれをしなければいけないというのはないし、問題意識さえ持てばどうしてもそっちに気が行くから、逆に向こうからやってくるような気持ちやしなくもないんだよなあ。これまでだったら見逃してしまった本やニュース、他の人の話に反応するようになる。やっぱりアンテナを張れば何かそこに引っかかってくるものがあるから、色々なことやってみれば！としか言いようがないよね。あと色々なことについて、興味関心を持てば自ずとやるべきことが見えてくるっていう気もする。僕の場合、たまたま手に取った本や先生・先輩・友人との出会いもあったけど、それは単なる偶然だけでなく自分がそういう問題意識を持ったからこそ、そういう偶然的な出会いがあったということなんじゃないかと思うけどね。





今、研究や学生との関わりでやっていきたいことは？

今、研究グループの中で取り組んでいる“子ども史”研究の中で、苦しい状況下でも人が生きているっていうことが活き活きと描けるような何かを研究して、文章にして書きたいなって。つまり児童労働を告発することも大事な仕事だが、そういう状況で子どもたちはどういう思いで生きたんだろうなっていうのを知りたい。それが今にも繋がってくると思う。例えば貧困の子どもたちは苦勞しているし、その問題を解決しなければならない。でも現に子どもたちは本当に苦しいだけなのか。彼らなりに苦しみの中でも喜びを見出しているのではないだろうか。人間が生きてってそんなもんだよなって思える何かを見つけないか。うまくいくのかどうかかわらないという不安はあるけどね。

あとそういう子どもたちに関わって何か社会貢献ができればいいと思う。授業としては、世界のあちこちに簡単に解決できない社会問題がいっぱい転がっていて、学生に関心を向けてほしいということを伝えていければと思う。



▲先生に勧められた本。



総科生へのメッセージ

広島大学、特に西条ってここで完結してるよね。もちろん、世界にはばたくとなんかそう簡単ではないけど、現代はインターネットもあるし色々な形で外に目を向けられる可能性はあるわけで。大学で学ぶ、勉強するってことは、できないことができるようになるとか、わからなかったことがわかるようになるとか、基本的に楽しいことってこんな楽しいことはないはずだよね。やるんだったらそこでなんか楽しみを見つけてやればいいと思う。広大の中でも総科はすごく面白いんじゃないかな。総科の良いところって、色々な分野があるから多様性がある。それに、先生方も広大出身じゃない方や個性的な先生が多いので、先生たちと話すだけでも、世界が変わることも大いにあると思う。多くの先生が割と自由に話が出来ると、とにかくこんな狭いところで完結しないでもっと遠いところに目を向けてみようね。制度化された環境でやるんじゃないかって、自分で考えて決めて行動していくようなことをしないと。それが僕の願いだけどなかなか今の時代難しいよね。学生の自由な発想や行動が制限されてきて、結局制度の枠内で右往左往している。そこの息苦しさも考えてもらいたいと思う。

“一人でいることは自由。全然寂しくない。”

”

まず先生が大学でしている研究を教えてください。

博物館のメディア性という研究をやっています。少し前から、博物館を一つのメディアとしてみようという研究が出てきたんですね。例えば、TVを見てなにか学んだりチャンネルを変えたりする。博物館もそうで、何か展示品を見て満足したり、つまらなかったら次に行ったりと、ものと情報とを来館者が取捨選択したりすることをメディア性といいます。マスメディアと同じように人間とものが相互作用しているんですよ。どういう風に並べると人々の理解が進むかとか、または次も来たくなるかとかは、単に広告を打てばよいかということじゃなくて、実はそこは満足できる面白い空間じゃないといけない。はやりの言葉で言うと、みんなを感動させるものでないといけない。今は博物館だけでなく、広島平和記念館や美術館にも調査に行ったりしています。

そのテーマに行きついたきっかけは何ですか？

僕はもともと物理学で宇宙について研究していたんです。それから民間のシンクタンクで働いている時に科学館の設計の話が舞い込んできて、埼玉県の中川市の科学館のお手伝いをする事になったんですね。そこで初めて世界の有名な科学館を見に行く機会があって、これをきっかけに疑問が湧いたんです。理科離れとか言われているけど、なんでみんな理科が嫌いになっていくのかなって。それで、そのころ読んだ本に『博物館体験（ジョン・H.フォーク著）』っていう本があって、それが僕にとって衝撃的だったんですね。例えば、博物館ってたくさんものがあるってそれをどう理解すればいいか難しい。だけど、その中から2つを選んで比較するとすごく勉強になるんです。このように、博物館はお客さんに視点を提供しなきゃいけない。他にも、僕たちは博物館に行く前からいろいろ情報を得て、博物館に対して期待している。言い換えると、ポスターとかにすごく影響を受けている。それから、博物館に行った後とかもみんなと話をしたりとか、博物館のグッズを、結構どこにいったか忘れちゃうんだけど、時々ポロっと出てきたりすると、なんか思い出してうれしかったりする。そうしてまたその体験を思い出して、他の人に話す。博物館にいる間だけじゃない、そういう一連の行動が博物館体験だって、この本には書かれていたんですね。そういう考え方ですごく面白いなと僕は思って、それをきっかけに今の研究を始めたんです。

博物館のメディア性



四田篤先生

社会探究領域
社会フィールド研究授業科目群



インタビュー担当

福本理乃・山本泰平・グリット・長野葵

平和記念資料館にも調査に行っているとおっしゃっていましたが、普通の博物館とは何が違うと感じますか？

平和記念資料館は今年度調査し始めたばかりなので、何をどうしたらいいのかまだ結論が出ていないですね。祈りの場であることは間違いないけど、祈るだけではない何か次のステップがとても重要だと思っています。むしろ、未来に対して希望が持てるような終わり方をしないといけない。今そうなっているでしょうか。みんな、折り鶴や被爆者の衣服などを見て、心を痛めて終わってしまう。希望が持てるってどういうことでしょうかね？

核兵器のない未来？ いや、そんな単純な話でもないと思います…。

そうやってみんなで議論することが大切だと思います。例えば、75年は草木も生えないと言われていたところに初めて花が咲いたという写真に勇気づけられますよね。被爆した木が新しい芽を出したとか。そういったことに象徴される「僕ら自身も頑張ろう」という気になるような終わり方をしたほうが良い。もう一つ重要なのはそれを外国の人が分かるのかという話です。日本人は毎年8月6日に広島のをセレモニーを見るし、広島と言えば原爆という風に勉強する。でも、アメリカ人を何も考えずに広島の平和記念資料館に連れて行ったときどんな気持ちになるのでしょうか。行く前にすごくビビるんじゃないか。「お前のせいだ」って言われかねないって。そういうことを僕らは考えずに彼らを連れて行ってしまっただけで、本当はすごく残酷なことをしているんじゃないかと思っています。僕らは今アメリカに対して敵意を持っていないし、確かに原爆を落としたのはアメリカかもしれないけど、仕返しをしてやろうという気持ちはないわけです。でも、落とした方からしたら、もしかしたらそういう懸念があるかもしれない。そのために、平和記念資料館の前に、まず広島とアメリカの関係について説明してから入らないといけないんじゃないのかなと思います。前提条件が違うとか、今はそういうことに問題意識もっています。

他にも、僕のゼミでは地図のデザインを扱っています。主に紙や看板の地図とかをやっていて、この地図も、僕はコミュニケーションツールとして考えているんです。地域の人と観光者の間のコミュニケーションが地図によって生まれたらいいなって思う。色合い、ピクトグラム、フォントなどその地域にあったものじゃないといけないんです。だから、広島市内の中心部でみんなが歩きたくするような地図ってどんなものかっていうのを研究しています。

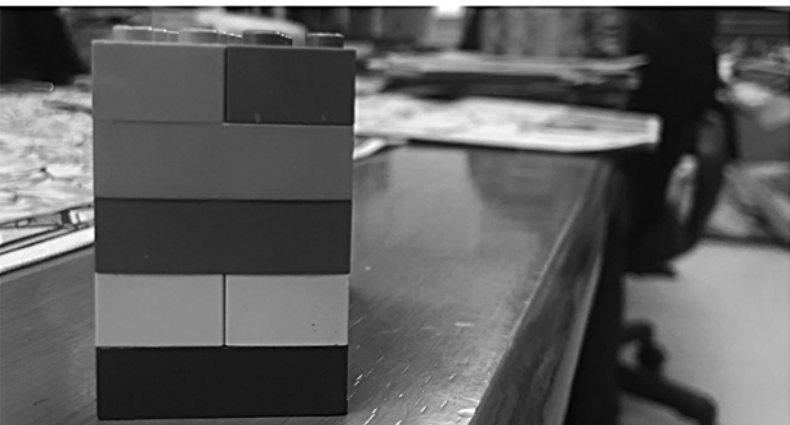
アイデンティティ?



▲先生が街のデザインを説明しているところ。

そのまちのどこをアピールしたいかによって、地図は変わってくるのですか？

新しい街を作るんだったら、なりたい姿でいいと思います。だけど、たいていのまちは歴史を持っていますよね。だから、変わらないものは何かとかを考えていくと、地図上の色や文字が決まる。自分たちの街であればあるほど生い立ちってというのは気になってくる。番組で取り上げる時にも自分たちの街であれば面白いですよ。行ったことのない街のプラタモリはあんまり面白くない。それは、アイデンティティとすごく深い関係があるからだと思います。でも、意外と僕たちは自分たちの生まれた街がどういう風に出来上がってきたのかということ知らなかったりする。そういうことに興味を持ってもらって「私たちの街って昔からこうだよ」ってみんなが言えるようになると街の魅力がすごく上がる。その結果、一つとして地図のデザインが出来上がってくるんじゃないかなと思います。そういう、みんなが持っている街の共有の財産というものを再認識することにすごく興味があります。簡単に言えばその都市の情報ですね。名所を新しく作らなくても、地味な所でも、みんなが「昔ここで何々があったよね」とか「誰々が戦ったよね」とか、そういう話があると、今は何にもなくてもそこで語れますよね。時間が経つと忘れてしまうことだけど、それをみんなで語り継いでいくってことが面白いと思います。



でも、それは良いことだけじゃなくって、つらい記憶、戦争だけでなく、土砂災害のこととかも語り継いでいかなければいけないんです。そういうことは、みんな出来れば思い出したくないし、声にも出したくない。でも、それを忘れちゃうと次の人が同じ被害に遭ってしまう。被害に遭わないためにもう一度勇気を出してというか、頑張ってみんなに伝えなきゃいけないんですね。そういった、リスクコミュニケーションや都市の魅力ということをやっています。怖がらせるだけじゃみんな同じことになってしまう。



ひとり旅



先生はどのような学生時代を送りましたか？

大学2年生のときに一人旅に目覚めたんですね。きっかけはすごく単純で、北海道に友達と行くつもりだったんだけど、前日になって急に友達が行けなくなったんです。出発当日にとりあえずその友達と一緒にご飯を食べて、じゃあこれから僕行くからって言ったんです。その友達が悔しがらせたかったんですね（笑）。それから一人で出かけて10日間くらいうろろしていました。一人で行って実はすごく勇気があるんだけど、その一人で行く気楽さとか、一人だからこそ現地の人と話をするし、そういう自由さっていうものに目覚めたんです。その自由さが僕を一人旅にさせた一番の大きな原動力ですね。旅をしているといるいるな生き方をしている人がいるなあって感じました。豊かさって言うてもいろいろな豊かさがある。日本に住んでいると、割とどこの街も似たような街になってしまうと思いがちだったんですね。それでも、みんなが楽しいと思っていることが国によって違ったりとか、人生の楽しみ方は人によって違うんだなあってことをすごく感じました。生き方は一つのはかりでは測れないということですよ。

どういった流れで教員になられましたか？

民間会社にいるときに、腕試しだと思って広島大学の募集に出してみるといわれて、運良く受かってしまったんです。それから二年で元の職に戻るつもりが、面白くなっちゃって。その頃は大学と地域を結ぶ地域連携の仕事をしていたので、総科ではなかったんですけど、段々とメディアを教えていることが評価されて、総科の教員として採用されました。僕のようなキャリアパスはまだ少数派だし、僕ももう一遍同じように生きるのは、難しい。しかもこれがベストかどうかもわからない。だから、ただ目前に与えられた課題を面白がっていたら今に至っただけですかね。



総科生へのメッセージ

一人の時間を大切にしてほしいですね。一人の時間って自分を高めることができると思うので、本を読んだり妄想したりする。そういう時間って友達といるときにはなかなか訪れません。だから一人の時間にどんどん妄想してほしいし、どんどん読書してほしいです。そうやって自分を磨いていくっていう作業をしてほしいと思っています。僕もそうだったんだけど、大学の最初の頃って一人は負け犬・寂しい人みたいに思われますよね。でも本当は全然寂しくないです。だって一人だと知らない人としゃべるチャンスがある。二人以上いると他人からしゃべりかけられないですよ？一人旅同士ってそこで結構コミュニケーションが生まれます。だから、一人でいるっていうことは自由なんだからって早く気が付いてほしいなって思いますね。独りぼっちとか言わないでください。それでも寂しくなったらこの研究室にコーヒーでも飲みに来てほしいと思います。

“偶然のチャンスに 冒険してほしい。”

インタビュー担当

廣田香・原西あさみ・長野葵・奥野慎也



自然探究領域
生命科学授業科目群

彦坂
暁
先生

動物の 進化



まず先生の現在の研究テーマについて教えてください

広く言えば動物の進化について研究をしています。具体的に言うと、我々人間の先祖をどんどん辿っていくと、例えばお猿みたいな形をしていますよね。もっと辿ると爬虫類とか両生類みたいになります。それで、カンブリア紀までさかのぼると、今でいえばお魚みたいな先祖がいたであろうところまでは化石を調べるとわかるんですね。でも、そのさらに昔の先祖ってどういう形をしていたか分かりますか？

ちっちゃい微生物みたいなやつですかね？

そうなんですけど、その本当のかたちとか、どういう暮らしをしてたかとかは、多分まだ世界中の誰も知らないことなんです。それを知りたいというのが一つの大きな動機ですね。それで、どれくらい遡りたいかという、僕が今研究しているのは、僕らは体が左右対称ですよ。一方クラゲなんかは、左右対称じゃないよね。イソギンチャクとかもね。進化のある時点で、動物が左右対称な体を獲得したときがあるんですね。左右対称になると何がいかっていうと、前と後ができて、背中とおなかができる。それに対して、クラゲとかイソギンチャクとか思い出すといいけど、彼らはあんまり激しく動かないよね。だけど左右対称になって、頭ができて脳ができてそこに感覚器みたいなのができる。それから

おなかと背中ができて、例えば這って動くにしても、おなかを海底とかにつけて、前に向かって這う、あるいは泳いでもいいんですけど、すごく運動性が上がる。クラゲやイソギンチャクに比べてね。そのころの先祖がどういう姿をしていたのか、最初に左右対称になった先祖がどういう姿をしていたのかが知りたいなということですね。だけどなかなか化石は出ないんですよ。だから僕は、今生きている動物を調べることでその姿が分からないかということを考えてやっています。その材料として、無腸動物という動物のグループがいて、もしかしたらそれが、僕たちの遠い祖先が左右対称になったころの姿を今にとどめている可能性があるといわれています。それが今でも採集できるので、それを調べています。



無腸動物は食事はできるんですか？

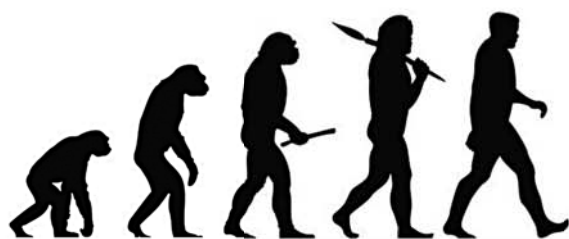
腸が無いっていうんですけど、一応食べることはできます。つまり、僕らみたいなちゃんとした腸じゃない消化器官があります。僕らは、口から入ると胃があって腸があって、基本的に口から肛門にかけての管状になっていますよね。そういう管状の腸が無腸動物にはなくて、ただものを捕まえて消化するような組織はあるということですね。

先生は学生時代から現在のような進化の研究をしていたのですか？

大きく言えば進化の研究をしたいと思ってやってきました。でも材料はいろいろ変わりましたね。大学院生のときは「ホヤ」について研究しました。日本では東北地方で養殖されていて、マボヤっていいです。我々にとっても近い仲間で、卵からうまれたばかりの時はオタマジャクシみたいな形をしています。これが何日かしばらく泳いで、その後、岩とかにぺたっとくっついて、そのまま生活を始めるんですね。

どうしてホヤに興味を持ったのですか？

大学院の研究室がホヤを使って研究していたんです。大学院生時代は発生学(卵がどうやって親になるのかという発生の仕組みを調べる学問)に没頭して、ホヤのしっぽにある筋肉が、どういう仕組みでできるのかを調べていましたね。広大に就職してからは、アフリカツメガエルの研究をはじめ、最初はカエルの変態の研究をしていました。研究を続けているうちに、たまたまカエルのトランスポゾン(生物のなかにある染色体から飛び出し、別の場所に入る動く遺伝子)を見つけたんですね。それからトランスポゾンと進化の関りの研究を10年以上続けた後、無腸動物の研究を始めました。



トランスポゾンについて詳しく教えてもらえますか？

トランスポゾンは、例えば、カエルならば、カエルにとって何の役にも立たないもので、要するにウイルスみたいなものです。感染してきて寄生しているような遺伝子です。宿主の中で勝手に増えるため、宿主にとってはあまりうれしくない迷惑な遺伝子なんですけど、それが時々宿主にとって役に立つように進化をするんですね。今まではよそ者で何の役にも立たずに、むしろ迷惑だったものが、居候しているうちに、何かの拍子で宿主にとって役に立つものに進化して、宿主と共生を始めることが、ごくたまに起こります。僕が見つけたその遺伝子は、カエルにとって役に立つように進化した遺伝子だと言えますね。その「役に立っている」ということはどういうことかを研究していますが、まだはっきりとしたことは分かっていません。

遺伝子が動く？

「遺伝子が動く」というのはどのように動くのですか？

トランスポゾンは普段は宿主のDNAに大人しく入っているんですが、たまたまある時にある場所から切り出されて、別の場所に移動します。ストレスがかかるとトランスポゾンが動くという研究もあります。元々の場所に残ったまま移動する、つまり自分でコピーを作って移動することもあります。移動するだけでなくコピーがどんどん増えていくんですね。

ヒトでトランスポゾンがみられる例はありますか？

ヒトのゲノムは半分くらいトランスポゾン由来の配列だと言われています。しょっちゅう入ってきては増えていて、ゲノムがどんどんトランスポゾンで満たされていくイメージです。何千万年というスケールでどんどんゲノムを書き換えていきます。DNAは親から子、子から孫というように垂直にどんどん伝わっていくというイメージがあるけれど、それだけではありません。生物には外からいろんなものが入ってきているというのが実は正しい姿です。そういうものが入って来た時に何が起こるのかも知りたいですね。



教員紹介

先生が学生時代に取り組んだことは何ですか？

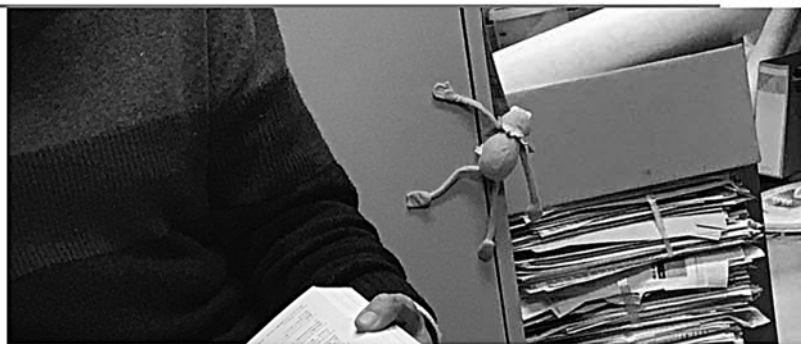
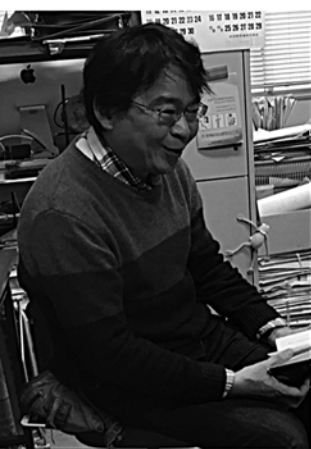
京都大学に通っていて、授業には適度に出席しつつ古本屋に通っていました。本が好きだったため、古本屋を巡っては本を買って読んでいましたね。他には映画館で古い映画を安い料金で観ていましたね。友達や先輩と勉強会もやっていましたね。京大の理学部ではそういう伝統があって、授業に出るだけではなく自分たちで勉強していました。科学の専門の勉強だけではなく、科学周辺の哲学や歴史、環境問題なども輪読して勉強するんです。でも今思えばもっとちゃんと授業に出ておけばよかったとも思いますね。講義を聞いておけばよかったと思う先生がいるから、とてももったいなかったなと思います(笑)。

先生が専攻を決められたのはいつ頃ですか？

僕は物理が好きで、1年生の時は物理にしようと考えていました。でもいくつか生物の本を読んで、それがとても面白かったです。特に進化の関係の本を何冊か読んだことがきっかけで生物を学ぼうと決めました。ジャック・モノーっていうノーベル賞もった生物学者が、『偶然と必然』という本を書いたんですが、半分生物学で半分哲学みたいな本なんです。この本に大きな影響を受けました。

生物と哲学のつながりがあるんですか？

まさにモノーが言っているんですけれど、科学って何をやるためのものだと思いますか？



う〜ん・・・わからないものを見つけること？

そうですね。真理を見つけることです。科学ってもちろん、生活の役に立つのも当然ですけども、人が知らない新しいものを見つけて世界を知る活動です。ただ、世界の何を知らたいのかが問題です。モノーも本の最初に「あらゆる科学の究極の野心が人間の宇宙に対する関係を解くことにあるとすれば…」と言っているんですけど、人間や自分がこの宇宙の中にどうしているのかを本当は知りたいのではないかと思います。だとすると、生物学はその問いにストレートに答える学問だと思っています。そもそも生命がどうやって誕生し、そこから人がどうやって進化してきたのかを明らかにすることで、この宇宙において人はどういう存在なのかを知ることにつながります。モノーの時代に生物学的なことがどんどん明らかになり、そういうものを基にして「人とは何か」と考えたときに、モノーは『偶然と必然』に書かれたようなことを言ったわけなんです。このモノーの本の内容に対してはとてもいろいろな反論もあります。批判や論争が起きること自体、おそらく多くの人がそういう問題に関心があったからだろうなと思います。僕も学生の時に生物学をやることで、そういうことにちょっとでも近づけたらいいかなってことを考えていました。

総科生へのメッセージ

総科の学生はとても優秀でポテンシャルがすごく高いと思いますが、それをどう活かすかが大切だと思います。総科は自由だから、何かの分野のスペシャリストにもなれるし、ジェネラリストにもなれます。自分で考えて自分で選ばなければならないのです。だから、ただ流されるだけではなくて、自分はどうなりたいかを考えて生活を送ってほしいと思います。みんなが実感しているかは分かりませんが、大学はすごくいいところです。大学を出たらなかなかアクセスしにくい、色んなリソースが大学にはあります。例えば授業があり、設備がとても整っていて、図書館もあり、友達や先輩や教員もいます。それを無駄にしないで利用してほしいと思います。その一方で、頭で考えた通りに人生は進みません。今振り返ってみれば、人生の中の色々な節目には、偶然や思いがけないことが起きていました。例えば、先生や友人との出会いや、たまたま手にとった本で、人生が意図しない方向に変わっていくことが結構あります。だから、計画にはなかった偶然のチャンスに冒険してほしいとも思います。人生計画通りもいいけど、それはちょっとつまらないかもしれないね。何にでも飛び込んでいくような心構えをしておくと、自分が飛躍できるチャンスが生まれると思います。頑張ってください。

“ I hope you to learn to be alone. I believe time to be alone gives us not only time to study but also a time to think about life. ”

FROM LANGUAGE TO SOCIOLOGY

What is your study field and how did you become interested in it?

My research field is welfare sociology. I am doing the research of migrants, especially elder minorities in Japan, Taiwan, Korea, and the United States. I am researching how they live, what they need, and what kinds of supports should be provided to them.

What made you curious about migrants' topic?

I have been teaching Japanese for almost 30 years and I had been just interested in teaching the language, grammars, and idioms, but I realized learning language is not enough for them to adapt to Japanese society. For example, one day my students who were working at a factory asked me what their employer told them mean. The employer gave them a piece of paper, and they do not understand what it says. It was about the change in their working condition. I explained to the students what the paper says. I had similar experiences and it made me noticed that there are various kinds of issues, such as education, labor, poverty, etc., which makes newcomers' life unstable. So, I started to support them outside the classroom, because it is vital for them, their family and Japanese society. You may know, in Japan many people and even the government regard migrants' daily issues are "private" so that individuals have to deal with them by themselves. As diverse a country becomes, it should have an integrated policy which includes measures to help, but Japan does not have any yet. So, I should say I became "serious" about migrants' issue, rather than "curious" about it. That is why I shifted from teaching language to researching sociology.



IGS
Field of Culture & Tourism

PROF.
**NAOE
KAWAMOTO**

Interviewers

*Esolya Gankhuyag • Keito Hosomi •
Mikael Kai Nomura • Minami Ito*

Was it scary for you to shift to such a different field?

No. I was very optimistic. I thought diving into a new field would be fun. In fact, I have loved reading books, so, I thought I could manage it. However, I found out that I do not understand anything about welfare sociology after getting into graduate school. I felt like a failure.

How did you deal with that?

I had to overcome. I did everything I could do. I asked my seniors how to study. After I graduated from university, I have been teaching Japanese, so when I came back to school when I was 30 years old, I almost forgot how to study, the proper way to read books, and how to find my research questions. Therefore, I started re-reading books including how-to books; how to set a study topic, write reports, read books and so on. That is why I always tell you to read books. The stock of knowledges you have got from reading would help you someday in near future.

Do you have any tips on how to read more books?

You do not have to read very thick and specialized books. You can read novels, business tips, self-help books, or anything. I recommend that you get used to read every day. How about starting from reading one page a day? The key to keep your reading habit is to read little by little and also to have broad interest. Moreover, about making time, I think everyone needs to learn to spend time for themselves, not for others. In my university years, there are no SNS, so after I have got home, I could use whole of my time only for myself to study, read or to think of my life until next morning when I go to school again. However, things are a bit seem to be different in that age. Instead of spending all your time communicating with friends through SNS, spend at least 30 mins a day for reaching your goal, acquiring knowledge, or improving your skills and talents. I hope you to learn to be alone. You may think it is boring, but I believe time to be alone gives us not only time to study but also think about life.



IGS Students?

Do you see any interesting difference between IGS Japanese students and students in other department?

I believe they are much more acceptable for foreigners. IGS Japanese students are very global-minded, thanks to their interests, language abilities, and experiences. That makes it easier for international students to get along with them, as there are more trust and acceptance, instead of doubt and fear. That is the foundation of building honest relationships with people.

What does it feel like teaching in IGS?

It is exciting and very challenging as well, not because of English but of the multiformity of students. I have been teaching international students for years, but this is my first time to teach Japanese and international students together. Their backgrounds and the knowledge they have are not the same, so every class is very challenging for me. When I stand on the platform, I always get conscious of two things: how I can make international students understand the concepts and how I can make Japanese students perceive it only in English, especially because my class is about Japanese issues. Japanese students may know most of the topics in my class, but they need to understand those in English. For international students, they need to learn items that are not common for them. Therefore, teaching IGS students is very challenging for me, and very interesting at the same time. I really love teaching them.

What do you do on a day off?

I usually spend my day offs for driving. I especially love to drive sea sides and mountains, I drove to Shobara last weekend. I also love to sing alone while driving, when nobody is listening to me. I am a member of a chorus group. I sing Japanese Classic songs. I also take part in a vocal class. I liked singing when I was a child, but as I got older, I became too busy to sing. However, when I came here in Hiroshima, I decided to do something I have been interested in, and I remembered that I used to love singing, so I searched for music schools and started to sing again. One of my favorite songs is The Lullabies of the Silk Tree by Empress Michiko. I also sing Chinese songs at karaoke.

◀ Prof. Kawamoto's photo when she drove to Shobara City.

THE PAST AND THE FUTURE

If you could go back to your 20 or 18, what advice would you have given yourself?

I would say three things: meet as many people as possible, especially adults, have your own time, and read books. When I was a student in Osaka University of Foreign Studies, professors were not as strict as now, and in my university, lots of professors who taught liberal arts subjects were from Kyoto University. As it is widely known, the most fascinating feature of Kyoto university is that the professors are not strict so that students have freedom. Not only they do not assign any homework, but they even do not request students to come to the class. Therefore, it is OK to skip the class as long as you can write the report or can pass the examination without taking classes. Until my graduation from high school, I had never met that kind of teachers. One day when I attended a liberal arts class with my friends, the professor asked me why we attend every single class. I have got confused by this question because I assumed that classes are made for students to attend. However, the professor continued that we could learn the contents of the liberal arts subjects by ourselves through reading books, so we might just read books at home instead of coming to the class. I could not understand what he meant at that time, but I did after I became a teacher. I think he wanted to tell us that we need to think harder by ourselves, instead of just coming to the class and sitting in seats. I guess similar thing can be said for reading. Just staring at the enumerate of words will bring you nothing, but you need to read as if you are having a conversation with the author. First, you need to understand what the author is telling us, and then you will have some questions when you finish reading it, but the author does not tell you anything anymore since it is the end of the book, so what you do next is to think about it by yourself. That is how to read books and what it is all about.



What is one main thing you would like to achieve in your study about sociology and migrants in the next 10 years?

Now I am researching the elderly migrants, and my goal in next 10 years is to contribute to society with my research. That is, investigate elderly migrants' life and needs for support after that I want to share the result with specialists of care, migrants' family and their supporters. These people will be able to make lists of supporting menus for elderly migrants. In the field of sociology, there are a lot of migrant studies which focus on younger generations and middle-aged, such as education, family, work environment, or human rights. However, researches on elderly people are very few. Recently, many researchers including me started to focus on elder migrants. They have culture-oriented, language-oriented, and personal needs. Culture-oriented and language-oriented needs are hardly fulfilled, and individual needs are very diverse. Then, can we leave elderly migrants socially excluded because of culture, language, and their personal needs? I don't think so. As a human, everyone should be respected and included in society.



Message for Students

Most of all, study hard. Also, explore the new world. You can find your new world through anything, for example through your studies, part-time job, club activities, or relationships with new people. You only live once. Carpe diem!